

## プロローグ

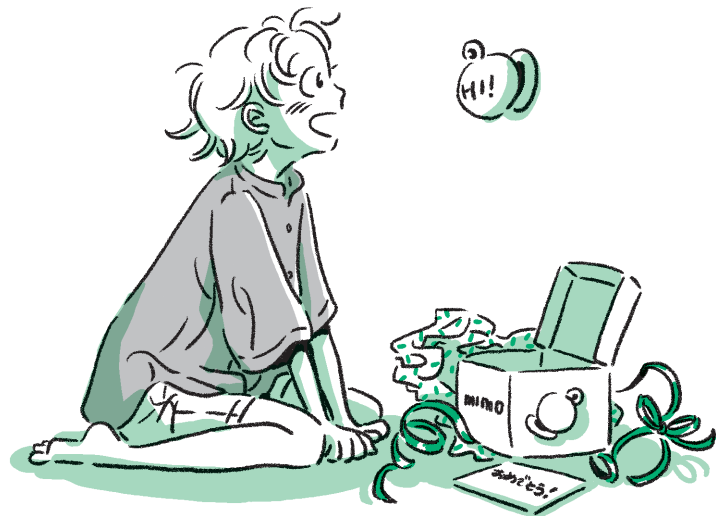
まほう

魔法のプログラミング・ノート

## ▶ ミニオはあんまり役に立たない

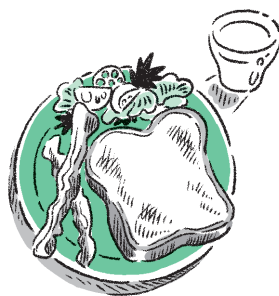
ユウは今日、7時より前に起きました。7月のまぶしい朝です。

ユウが10歳になって3日がすぎました。10歳になって変わったことはたった一つ。誕生日に、ユウのためのコンピューター・minio（ミニオ）を買ってもらったこと。その日からミニオが、ユウのあとを、宙をうかんでついてくるようになったのです。



ユウはよく、一人で朝ごはんを食べます。ママが朝起きるのが苦手だからです。

今朝の朝ごはんは、ママが前の日に作りおきしていただきました。トーストとカリカリベーコンとサラダです。朝ごはんを食べて、学校の準備をします。ランドセルに、



学校用のタブレットと電子ペンと、給食袋を入れます。

いつもより早い時間ですが、ユウは家を出ることにしました。ランドセルをせおって玄関に向かうと、後ろからミニオが追いかけてきます。

玄関でくつをはきながら、ふとユウは心配になりました。今日は絵の具セットがいるかも、と思ったのです。そこで、ミニオに声をかけます。



「ミニオ、今日の持ち物を教えて？」



《答えられない質問です。質問の意味がわかりません》



「えー」



ユウはがっかりしてしまいます。

ミニオは、ユウが思った通りに、全然動いてくれません。

(おとなりのサキちゃんは、もっと便利にかっこよく、サキちゃんのミニオを使っていたのになあ)

小学4年生くらいになると、みんな、自分のミニオを買ってもらいます。ユウも、ずっとほしいと思っていました。

でも実際に使ってみると、ユウのミニオは、思ったより便利ではありませんでした。

おとなりのサキちゃんの持っているミニオは、とても便利そうでした。たとえば、忘れ物を注意してくれたり、今日の予定を教えてください。

ユウは自分のミニオにも、サキちゃんのミニオみたいに動いてほしかったのです。

だってユウは、自分の忘れっぼさに、すごく困っているのですから！

でもユウのミニオは、絵の具セットがいるかどうか、教えてくださいません。だから自分で調べなければいけません。

ユウはランドセルを一度下ろします。ランドセルから、学校でもらったタブレットを取り出しました。学校からのお知らせは全部、このタブレットの連絡帳アプリに入っています。

(ママ、ミニオがタブレットの中身を読める設定にしたって言ったのになあ。読めるなら、持ち物教えてくださいればいいのに)

ユウはタブレットの連絡帳アプリを立ち上げました。学校からのお知らせの持ち物リストを見ます。今日は絵の具セットがいる日でした。あぶない！

ユウはくつをぬいで、絵の具セットを取りにもどります。

そう言えばユウは、朝起きたときには、今日の持ち物をチェックしないと、

と思っていました。でも、タブレットを手にとって連絡帳アプリを立ち上げるのがめんどろで、あと回しにしてみました。そして、忘れてしまったのです。

ユウはいつもそうです。やらなきゃ、と思ったことや、覚えておこう、と考えたことを、すぐに忘れてしまいます。

学校でも、先生から「忘れ物しないようがんばってね」と言われています。

(がんばってって言われても、どうがんばったらいいかわかんないよ。

ミニオが、聞いたらすぐに、今日の持ち物を教えてくださいたいのになあ)

ユウは絵の具セットを取ってきて、もう一度くつをはき直します。



「いってきまーす！」

おくの部屋で寝ているママに聞こえるように、大きな声であいさつをして、玄関を出ました。ミニオがついてきます。

外では、7月の太陽が、並木の葉を光らせていました。



## ▶ おとなりのサキちゃんと、サキちゃんのミニオ


とおで 通りになると、すぐに<sup>し</sup>知<sup>か</sup>った<sup>か</sup>顔<sup>お</sup>を見<sup>み</sup>つけました。

(あっ、サキちゃん！)


おとなりの、3つ年上<sup>としうえ</sup>のサキちゃんです。今日<sup>きょう</sup>は早起<sup>はやお</sup>きしたから会<sup>あ</sup>えたのかな、とユウはうれしくなりました。


中学校<sup>ちゅうがっこう</sup>の制服<sup>せいふく</sup>を着<sup>き</sup>たサキちゃんは、いっしょに小学校<sup>しょうがっこう</sup>に通<sup>かよ</sup>っていたころより、ずっと大人<sup>おとな</sup>っぽく見<sup>み</sup>えます。サキちゃんのとおりには、サキちゃんのミニオがうかんでいます。

サキちゃんは、ユウには<sup>き</sup>気づかず、サキちゃんのミニオに<sup>こえ</sup>声をかけました。

 「ミニオ、今日<sup>きょう</sup>の持<sup>も</sup>ち物<sup>もの</sup>は？」

サキちゃんのミニオがすぐに<sup>こた</sup>答<sup>こた</sup>えます。


 《今日<sup>きょう</sup>の持<sup>も</sup>ち物<sup>もの</sup>は、リコーダーです》

 「よかった、忘<sup>わす</sup>れてないね」

ユウはびっくりして、その場<sup>ば</sup>に立<sup>た</sup>ち止<sup>と</sup>まりました。

(サキちゃんのミニオ、やっぱり、わたしのミニオと<sup>ぜんぜん</sup>全然ちがう！)

サキちゃんが、ユウに<sup>き</sup>気がついて、<sup>こえ</sup>声をかけてくれます。


 「ユウちゃん、おはよう。朝<sup>あさ</sup>に会<sup>あ</sup>うの、ひさしぶりだねえ」


 「うん……」


ユウは、元<sup>げん</sup>気なくうなずきました。自分<sup>じぶん</sup>のミニオがサキちゃんのミニオと<sup>ぜんぜん</sup>全然ちがうことが、ショックだったのです。

ユウはサキちゃんにつられて、とぼとぼ<sup>ある</sup>歩<sup>あ</sup>き出<sup>だ</sup>します。


サキちゃんは、ユウのとおり<sup>め</sup>のミニオに<sup>と</sup>目を止<sup>と</sup>めました。

 「ユウちゃんもミニオ、買<sup>か</sup>ったんだ」

 「うん。ママ、買<sup>か</sup>ってくれるのおそいんだよ。みんなと<sup>も</sup>っくに持<sup>も</sup>ってるのに」

 「もう仲<sup>なか</sup>良<sup>よ</sup>くなれた？」

サキちゃんに聞<sup>き</sup>かれて、ユウはつい、しかめっつらになってしまいました。

 「あんまり。このミニオ、どこかこわれてるのかな。サキちゃんのミニオみたいに、なんでも<sup>こた</sup>答<sup>こた</sup>えてくれないんだもん」



「うーん、そうだねえ、プログラミングはした？」



「プログラミング？」

そういえば、ミニオについていた説明の動画、ちゃんと見ていないな、とユウは思い出しました。確かに動画では、プログラミングがどうこう言っていたような気がします。

ママもなにか説明してくれていたけど、ユウははじめてミニオを動かすのに夢中で、あまり聞いていなかったのです。

サキちゃんは、自分のミニオをちらりと見て笑いました。



「わたしも最初、ミニオのこと、そう思ってたよ。なんにも言うこと聞いてくれない！ って」



「えー、それってほんとう？」



「ほんとう。でも、プログラミングをしたら、仲良くなれたよ」

ユウは、さっきのサキちゃんのミニオの様子を思い出します。サキちゃんの質問にスラスラと答える、サキちゃんのミニオ。確かに仲良しって感じですよ。それって、プログラミングのおかげなのではないでしょうか。



「プログラミング、しなくちゃだめ？」



ユウも学校でプログラミングを習っています。けれど少し苦手です。キャラクターを動かしたり、ゲームを作るのは楽しいのです。でも、まちがえたらすぐに動かなくなるし、難しく感じることもあります。そもそも、**プログラミングを、なんのためにやらなきゃいけないのかわからない**のです。

サキちゃんは、ちょっと考える顔をしました。それから、ユウの耳に口を近づけて、ひそひそ声で言いました。



「あのね、ユウちゃんにいいものあげる。**魔法のノート**」



「魔法!？」



「そのノートの魔法を使ったら、きっとミニオと仲良くなれるよ」



サキちゃんはにこっと、すてきに笑います。



「わたしも人からももらったんだけど、わたしはもうミニオと仲良しだから、いらないの。学校から帰ったら、ユウちゃんちのゆうびん受けに入れとくね」

ユウとサキちゃんは、小学校と中学校の分かれ道に来ました。

じゃあね、とサキちゃんが手をふります。サキちゃんの制服のシャツに、並木の葉のかけと太陽の光が、まだらもようを作っています。

魔法ってどういうことだろう。

考えながら、ユウはぼんやりと手をふり返しました。

## 魔法のノート 最初のページ

その日、ユウは学校で、ずっとそわそわしてすごしました。学校が終わったとたん、かけ足で家に帰ります。あまりの速さに、あとをついてくるミニオが、少しスピードを速くしたほどです。

ゆうびん受けをのぞくと、タブレットくらいの大きさのふうとうが入っていました。サキちゃんの字で、「ユウちゃんへ」と書かれています。

そーっとゆうびん受けからふうとうを取り出して、ランドセルに入れます。そのままランドセルをかかえて家に入りました。なぜだか、ママにはひみつにしたほうがいいと思ったのです。リビングのほうから、ママの声がします。



「おかえりー。ユウ、イチゴあるよ。食べる？」



「ただいま、あとで食べる！」

イチゴはユウの大好物です。いつもなら飛びついていました。けれど、今日のユウは自分の部屋にかけこんで、かぎをしめました。

つくえ 机でふうとうを開けて、どきどきしながら中身を取り出します。

みどり ひょうし 緑の表紙の、きれいな紙のノートです。

ユウは学校でも家でも、タブレットと電子ペンを使っています。紙のノートなんて、ずっと年上の人が使っているのを見たことがあるだけです。

サキちゃんはこのノートを使っていたと言っていました。でも、このノートはよごれも折り目もない、まささらな新品に見えます。

まほう (魔法って、なにが書いてあるんだろう)

ユウはワクワクしながら表紙を開き、あれっと思いました。ノートの1ページ目には、なにも書いてなかったからです。

つぎ 次のページかな、とユウはノートのページをめくってみます。そこにもなにも書いてありません。めくってもめくっても、ノートには真っ白のページしかありません。



(サキちゃん、ゆうびん受けに入れるノートをまちがえたのかな)

そのときです。

ノートのページがひとりでに、パラパラとめくれはじめました。

ユウはびっくりしてノートから手をはなします。ユウの手をはなれてもノートはめくれ続け、最初のページまでもどると、ぴたりと動きを止めました。

そして、真っ白だったページに、じんわりと文字がうかび上がりました。

こんにちは、新しい持ち主さん！



「こ、こんにちは」

おも 思わずユウが返事をする、ノートはうれしそうにぼんやりと光りました。つづきの文字がノートの上にかび上がってきます。

わたしは魔法のプログラミング・ノート。  
これから、あなたがコンピューターと仲良くなるお手伝いをするね。  
あなたのコンピューターの名前はなに？

これは、ノートとお話ができるってことなのでしょうか。ユウはおずおずと答えてみます。



「ミニオ…」

ユウが答え終わると、次はこんな文が続きました。

だから、続けて文字がうかび上がったとき、ユウはいやな顔をしました。でも、書いてあることは、ユウが想像したのとはちがうことでした。

ミニオね、OK。

それじゃあ、プログラミングの魔法へようこそ！

あなたはどんな子かな。コンピューターは好き？ プログラミングはどう？

あなたがどんな子でもだいじょうぶ。

このノートの魔法を使えば、きっとあなたとミニオは友だちになれるよ。

このノートの使い方はこんなふう。

1. あなたが、ミニオといっしょにやりたいことを見つける

2. ノートの、新しいページを開く

3. やりたいことを、声に出して言う

4. ノートに書かれた魔法を使ってプログラミングをする

楽しそうでしょ？



「うーん…」

文字が出てくる魔法はすごいけど、ユウはあまり楽しそうには思えません。

なぜなら、ユウは知っているのです。楽しいよ、って言うてるドリルはたいてい難しいか、めんどくさいってことを。

（“はじめる前にこれだけは覚えよう”とか言うんでしょ。それで、難しい言葉をいっぱいならべるんでしょ…）

あなたはこれから、ミニオのためのプログラミングをする。このノートの魔法がそれを助けるよ！

はじめる前に、知ってほしいことがあるんだ。

コンピューターは、人間の役に立つように、人間が作ったもの。

だからあなたのコンピューター、ミニオは、あなたの命令を待ってる。あなたの命令を聞いて、あなたの役に立つためにね。

その命令が、プログラミングで作る、プログラムってこと。

プログラミングが、あなたとミニオを仲良しにする！

あなたは、プログラミングを難しいと思うかもしれない。まちがえることもたくさんあるかもしれない。

でも、まちがえたってだいじょうぶ。

どんなコンピューターも、何度まちがえてもおこらない。何度やり直しても、いやがったりしない。

何度でもまちがえて、やり直してみて。

まちがえるたび、あなたはミニオをわかるようになる。仲良しになれる。

コンピューターはおこらない。

プログラミングは、何度でもやり直せる。



これが最初の魔法だよ。

さあ、あなたがミニオとやりたいことを言ってみて。

読み終わったとき、ユウはもう、いやな顔をするのを忘れていました。

ユウは、ちらりとミニオをながめました。ミニオの上についてカメラのレンズが、ユウをうつしています。

(プログラミングでミニオと仲良くなれる？ サキちゃんとサキちゃんのミニオみたいに？)

ユウはうーん、とうで組みをして、また机に向き直ります。机の上には、魔法のノート。

ユウだって、ミニオがずっとほしかったのです。仲良くなれるなら、仲良くなりたいのです。そうして、ユウの忘れっぽさをミニオが助けてくれたら、どんなにいいでしょう！

ユウは、ノートの新しいページを開きました。

ミニオとやりたいことは、あります。プログラミングをすれば、やりたいことができるかもしれません。

そしてこのノートは、プログラミングを助けてくれると言っています。

(プログラミング、やってみてもいいかも！)

ユウは息をすって、小さいけれどはっきりした声で、言います。



「わたしがまず、ミニオとしたいことは…  
今日の持ち物を聞いたら、答えてほしい！」

